卒園児を送り出して思うこと

紀田典子

Yが唄っている！ 皆の前で大きな声で唄っている！ 背を向けていた私は、思わず振り向きたくなる心を慌てて押さえる。今、眼が合ったら……Yに何かを感じさせてしまいそうで恐い。『ほんとうに、うたっているの？』と傍にいた教師に眼で語りかける程度にとどめる。

今日は日曜日、教会学校に来ている小学生と礼拝を終えた後、クリスマスに向けての劇の練習をしているところである。四年生になるYは奴隷を働かせる兵隊の長、の役を引き受けている。

帰りの道すがら、幼稚園時代のYが頭をよぎる。しゃべることを極端に拒み、人との接触を持とうとしないYであった。机の下にもぐりこんで皆のあそびをじっとみていることが、いわば彼の「あそび」であった。こちらからの働きかけにも応じないYの姿は、まるで『自分の存在は自分だけが知っていればいいのさ』と言わんばかりであった。勤めて二年目だった私は、彼のそうした行動を頭では認めながらも、待つことのむずかしさを心に覚え、忍耐する力を体中に要求された。

—今、何を感じているのだろう——

—私に向かって、友達に向かって、叫びたいことはないのだろうか——

私の悶々とした思いとは裏腹に、Yは毎日元気に幼稚園に通い続けた。そして、「幼稚園はきらいじゃない」と言って卒園していった。（雨が降り始めたので傘をさしながら回想はつづく。）照れ屋のYの幼稚園時代の顔に、少したったかと思われる今日のYの顔が重なる。そして兵隊長の歌が聞こえてくる。思わず、私の口元がほころぶ。——よかった、幼稚園、たのしくて——口数は少なかったけれど、YはYなりに他の人の知

らないものを見たり、聞いたり、感じたり、味わったりして暮らしてきたことを今、私はYのために誇りに思い、同時に心がなごむのを覚えた。

今までに、たくさんの子供達が卒園していった。私が一人一人にどれ程のことをしてあげられたか、となると胸が痛む。でも、「一緒に暮らした」という事実はかなりの栄養となって今の私に働いている。幼稚園という場で、「私」という一個人の人格にAが出会う。Bも出会う。それは裏を返せば、Aという一個人の人格に私が出会うことにもなる。そこから双方のつき合いが始まる。出会いの仕方がそれぞれに異なるように、つき合いもまた、AにはA、BにはBのやり方がある。私の方も「自分」を必死で保ちながらAやBやC達とかかわりをもっていく。一緒に手を取り合うこともあれば、陰で見ていることもある。見ないふりもしてみるし、時には自分の思いを相手に伝えたりもする。

そうした全てを子供達は一応受けとめ、あとはそれぞれ自分達の持っているものに合わせて消化させていく。それらが、いつもおいしい食物であるとは限らない。まずいものも、嫌いなものも食べなくてはならないこともでてくる。その時には、多くの母親が我子に食べて欲しいと願って工夫を凝らすのと同じように、私達もまた、形を変えたり方法を考えたりする努力をしなければならない。それでも、大人の過度な要求があったり、子供達が自分自身で解決しにくい問題が起こると、彼らはそれを全身で受けとめることが出来なくなり消化不良を起こしやすくなる。それを助けることはできても、身がわりにはなれないつらさを知っている私達は、子供達の力を信じて励ましていける心をいつも備えていたいと思う。

小学校に進み、やがては中学生となっていく一人一人の子供達の成長の過程においても大人である私達は備えつづけていたい。「苦い」と思っても、すぐに、吐き出してしまわないで、自分の歯でしっかり噛みくだし、自分のものとしてのみこめる日が来ることを心待ちにしながら。そしてそれが生きていくうえで、次の栄養となって、力が与えられるようにと願いながら。

今日のYを見ていて、幼稚園での二年間の日々が、又私達とのかかわりが、幼なかったYの心に、そのような一粒の種をまくことが許されたのであったならば、教師としてとても幸せなことだと心から感じている。（武蔵野相愛幼稚園）